

Title	<紹介>山中共古著 『甲斐の落葉』
Author(s)	藤井, 讓治
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1976), 59(5): 826-828
Issue Date	1976-09-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_59_826-2
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

紹介

大牟田著

『アレクサンドロス大王』

——「世界」をめぐした巨大な情念——

アレクサンドロス大王の名前を聞くときに、わが国で一般に抱かれるイメージとは次のようなものではなからうか。ギリシアからイラン、中央アジアを越えてインドにおよぶ空前の大征服をなしとげ、ヘレニズム時代の幕を切っておとした英雄であり、人類同胞理念をいだいて東西の融合を推進した人物である、と。

このようなイメージが普及したことの理由を、簡単に論じてしまうことには問題があるが、W・W・ターンの研究に代表される、いわば「古典的」なアレクサンドロス像を受容してきたということが、なかなか大きいといわねばなるまい。しかし近年の研究は、そうしたアレクサンドロス像を再考し克服しようとするのを、ひとつの顕著な動向としていえるようにみえる。あまりにも華々しく、あまりにも理想化され、つとめて合理的な説明をほどこされた結果、ある意味ではあまりにも近代的な人格になりおせてしまったアレクサンドロス——

議論が反対の極に走ってしまうことには、もとより警戒を要しようが、再検討をめぐすこと自体には、充分の理由があると思われるのである。

本書の著者もまた、そうした潮流に棹さしつづ、「私自身のアレクサンドロス」を力強いタッチで描き出す。アレクサンドロスの行動の軌跡を、ともに生きるかのようにして辿りながら、彼とはどのような人間であったのか、あの大遠征とは結局のところいったい何であったのか、という問題に肉迫しようとする。

本書のひとつの特長は、けっして無理な解釈をせず、おおかたが納得できる説明の提示に努めているところに認められよう。しかしそれは、著者の意欲がなみなみならぬものであることと、いささかも矛盾しない。著者は史料を丹念に吟味したうえで叙述を進めているが、そのさいプロレマイオス・アリストプロス系の「正史」に対し、Vatagat史料のいうところにも積極的に耳を傾ける——例えばガザにおける復讐行為（九〇頁）や、ペルセポリスでの劫掠・放火（一〇九～一二頁）に関する説明などがそうである。最近までのアレクサンドロス研究の成果は、もちろん十分に消化されて

いて、アリストテレスが家庭教師として招かれたことの政治的背景（二四～二八頁）や、ピリッポス二世暗殺の背後関係（四一～四四頁）などについての有力な推論にふれたり、このところ脚光を浴びているアイ・ハヌム遺跡をとりあげて、アレクサンドロスがつくりだした「開かれた世界」の意義を論じたりする（二一九～二〇頁）。

著者はアレクサンドロスを、「未知なるものに対する抑え難い衝動」にかられ、武力征服をおのれの「誉れ」として飽くことなく追い求めた稀有の個性としてとらえ、そうした比類のない個性が躍動し燃焼するさまを、確かな筆致で生き生きと描いている。著者の熱意は行間にあふれ、読むのを瞬時も倦ましめない。頁数こそ多くはないが、密度の高い、すぐれたアレクサンドロス伝である。

（B6判 二三五頁 一九七六年三月 清水書院 四三〇円）

（大戸千之 立命館大学助教授）

山中共古著

『甲斐の落葉』

本書の著者山中共古は、本名を笑といい、嘉永三年（一八五〇）、江戸に幕府御家人

の子として生れ、明治七年キリスト教に入信し、同十五年メソジスト派の日本人最初の牧師となった人であり、本書は、共古が明治十九年より二十三年まで、甲府教会に在職中、布教伝道の途上で、見聞採録されたものによってできたものである。

本書は、明治二十二年六月『東京人類学雑誌』四十号から五十号に五回にわたって執筆された甲州習俗についての諸論文をもとに、明治三十五年に『同誌』に前後六回にわけて掲さいされたものであるが、柳田国男の配慮で、大正十五年に、『炉辺叢書』の一冊として刊行されたものである。

本書は、上巻一一頁、下巻一三五頁の小冊であるが、上巻には百五十項目、下巻には百二十項目を収めている。一々紹介するかわりに項目をあげておこう。

甲府今昔ノ戸数 熨斗ノ代用モノ 附乳 産婆へ出ス飯 女ノ子へ紅ヲツケル 宮 参 善光寺ノ御弟子 別火 サンシノ食物 七夜ノ食物 胞入 ヲシキ ヘソクリ茶 結納物 里婦ノ強飯 御柱年小宿 酒ヲ入ル 漬菜 イナゴ料理 食ス蛇食アメ平 空豆ノ莢 茶ガシノ代リトナスモノ カゲボン蓮葉ノ用 清メゴト

シカバナ 柳塔婆 新ブキノ草屋根 瘡神送り 商人ノ呼声 ヲヤウリコウリ 半天ノ染色 子供ノ手甲 毛虱 妻子ノ言葉ツカヒ ビンビク 二文字屋ノ符帳 符帳 足袋何文トイフ符帳 初買ト達摩売り 福俵 井戸へサス幣 節分イリ豆ノ時ニトナヘルコトバ 年神送り ヲホンダレ 笹ヲ高クカカグ 虫除 正月十日ノ団子 湯村ノ厄除地蔵 正月ノ子供ケンカ 道祖神 道祖神ノ神体 甲府道祖神祭ノ風俗 道祖神祭リ諸村ノ風俗 田中村道祖神 勝沼村ノ道祖神 黒駒辺布施村道祖神 カケハン村道祖神 勝沼村ノ水アビセ 谷村ノ道祖神 八幡村ノキツカンジ 甲府町々ノ休業 町内幕 道祖神ノ縁結 道祖神ノコンブクロ 北巨摩県村道祖神ノ積金 道祖神ノ時祝儀 銭ヲ乞フタ子 道祖神祭ノヤマ ヤマ竹ノ根元ヲ尖ラセル町 道祖神祭ノ旗 道祖神ノ守札 相興村ノ道祖神 アラマキノ道祖神 岩倉村ノ道祖神 名主ノ役徳イナホ 御田植 松飾 榎ノ葉ヲ戸口へ差ス 東山梨ノ松飾 勝沼ノ三ケ日門松へ飯ヲ供ス 年神ノ棚ヲトリ去ル 初山 オ粥カキ 盲女ノ年頭 オ粥カキヲ柱へ結付ル 鍛冶屋ノ仕事始 初午 稻

荷ノ紙職 正木稲荷ノ額 籬遊 ヒシモチ カナカンブツ 柏餅ニ添ヘルのし 卯花ノ代リ 七夕祭 靈棚 蒲荷ノ葉へ盛ル 高燈籠 七日日ト十五夜 土用ノ丑紅 虫送り 針供養 月見の団子 高尾山ノ賽銭 石殿ノ墓 六地藏ノ石燈籠 六地藏 東光寺ノ大地蔵 八米村ノ大地蔵 岩根ノ六地藏 馬頭観音 石塔地藏 味喰地藏 柏尾ノ地藏 子供遊 暖簾印 迷信ノ類 白壁ヲ嫌フ 夏豆ヲカマズ 芋ヲ作ラズ 地藏獄ノ石地藏地 蔵獄登リ 御嶽参リ土鈴 スモジ道 缺ノ形ヲ納ル シビレ湖八幡ノ安産守護 義光明神へ初表ル供ズ 底ナン柄杓 八ツカ獄登リ 名付紙 風除 雨乞 供物入 楊枝ヲ納ル 十日市ノ地藏 地鎮祭 呼水 撥鎌 提灯ノ紋 シブ団扇 桶 名物歌 田植女ヲコミシ歌 方言 煙草代用ノ葉 ネコノ尾ニ就テ 雨ガ降ル 風除ノ鎌 ゴチソイサマ アイサツコトバ 指ニテ情ヲ通ル 古俚歌 サツキ姫 西行峠ノ西行法師ノ閉口セシ歌

下巻
奈良田村ト湯嶋村ノ風俗及湯泉場 青木ノ湯泉 川浦湯泉ト大嶽山 粟粥ヲツケタル山女魚 ツメ書地藏 雷ノ社 纏文

土器出所 木ノ葉底土器 洞穴 人跡稀ナル地 洞穴 屋根ムネ 氷石 キノ神 菩提山ノ石橋 寺本村ノ大礎石 浅野ノ古瓦 疫神退散令 銚銭年代及場所 柏尾薬師堂ノ古物 玉スダレ 石棒 紙幣 コモ石 磨製石斧ノ用 職人ノ欠勤表 門松禿リ 吹ヲ嫌フ 猿橋 桃ノ花ヲ添ヘル 笹ノ葉ヲ敷ク 長座ノ客ヲ帰ラス 咒 小豆ヲ守縫ニ入ル ヲドレノ木 蛤ノ吸物 甲府湖水ノ古伝説 笠ノ台 焼米 金秋石 釵形スカンノ石殿 鉈彫大不動 細長石ヲ神前ヘツルス 鬼石 大草村ノ山払除 増穂村ノ日蓮宗 野守ノ役料 位牌袋ノ切レ 葬具ヲ守トス 白団子ニツ トンタガイ豆 会葬女ノ白手拭 子分棺ル荷フ 親分子分の関係 郡ニヨリ犯罪ノ性質ヲ異ニス カン徳利 古鉄瓶 カヂヤノ炭 樋竹 天目山ノ粟餅 コロ柿ノ天浮羅 四十九日餅 上手村ノ饗応 川ビタリ水神祭 民間薬法 御釜払 庚申仏餉 桜皮煙草入ノ元祖 一ビレニビレガキレル 無造作ノ仏像 逸見ノヲビ地方 頬紅 娘短刀を差ス ヒンビク 風俗測定 雪カキ 草ハウキ 火消ツボ 按摩 若者ニ悪マレン家 善光寺ノ印 善光寺ノ古文書 頼朝義経ノ像 読ガタキ地名 連理木ノ額 石斧

石塚ノ古物 大式撰文ノ碑 国分寺ノ古瓦 ヲ掘出ス 古城ノ門 姫ノ井ノ古物 素焼土器 富士塚 塚穴 古石塔 長閑マラ 山縣大式ノ墓 甲斐徳本ノ墓 梵字碑一 古五輪塔 両頭蛇 蟻ノ塔 咳ト瘡トノ咒 梨ヲ門口ヘ釘付ニス 四方塔 新製ノ石棒 山高ノ大桜ト道シルベ石 アイス語ランキ地名 面白キ新村名 郡内ノシヨイカゴ 団十郎ノ三升紋 戸口ニ張ル守リ 桜町ノ商家々業 鯉ト亀ノカナカンブツ 松ノ箸 廻リ地藏 地理誌紀行ノ書目

右の目録ではぼ想定していただけたと思ふが、本書の内容は、甲州地方を中心としたものであり、この地方の祭礼・習俗等の民俗に関するものと、道祖神・墓石・地藏・板碑等の記録とであるが、前者は、日本民俗学研究の後者は今日の板碑研究の先駆的な仕事である。

また、本書は山中共古という一日本人牧師が、明治十年代から二十年代にかけて、こうした研究をはじめたことの社会的・思想的価値を検討する上でのよき素材となるであろう。

なお、再刊に際して、巻末に山中共古の著作・論考目録と、略伝とが収められてい

(B6判 三〇〇頁、一九七五年九月 有峰書店 二、五〇〇円)
(除井讓治 京都大学助手)

訂 正

- 第五九卷三号
- 〇一四九頁上段、誤 (Rev.) の欄の最後に
- b. Mahmud を付け加え。
- 〇一五二頁下段七行目、Zahir→Zahir
- 〇一六三頁下段一行目、四二一年の冬→四二二年の春

お詫びと訂正

長島 弘

第五九卷四号の拙文「書評 A. I. Chicherov: India, Economic Development in the 16th-18th Centuries, Outline History of Crafts and Trade」において、著者の所説を誤って紹介した部分があり、ここにお詫びして訂正します。

一四〇頁上段一〇〜一一行目の「貫祖を納入する限りその土地から追立てられることはなく」を全文削除し、そのかわりに同頁上段下三行目の「封建的小作人」の次に括弧で括って、「(地代を納入する限りでのみその土地の用益権を保障される)」という一文を挿入する。なお、このような小作人を封建的小作人と言い得るかどうかについてはさらに検討する必要がある。